
飲んだことがきっかけで
坂田火魯志

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飲んだことがきっかけで

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

これまで恋愛には全く無縁であったが職場の後輩と一緒に飲んだことから。ユーチューブの漫画動画のオマージュ作品です。

第一章

飲んだことがきっかけで

工藤リンの母親は日本人で父親はアメリカ人である、父親譲りの赤髪をロングにしている母親の黒いはっきりとした切れ長の目とだ。形のいい顎と鼻、白い肌と一六〇程の背で見事なスタイルをしている。だが男の話はどういう訳かなく。

大学を出て働いて二十代後半になっても誰とも交際したことがない、友人達はそんな彼女に言うのだった。

「美人過ぎるから？」

「だからかしらね」

「リンに男の人に縁がないのは」

「モデルさんか女優さん並に美人でね」

「スタイルも抜群だしね」

「それにリン自身声かけないし」

「それでかしら。キスもまだなのよ」

リンは友人達に話した、今は居酒屋でパーティーをしてそこで飲んで食べながら話をしているのだ。

「私はね」

「それは逆に凄いわよ」

「二十七でそれって」

「誰だってベッド位はね」

「もう経験している年齢なのに」

「そうよね、もう結婚も考える年齢だし」

リンはグラスにある赤ワインを飲みつつ言った。

「交際もね」

「考えないとね」

「冗談抜きにね」

「それで結婚もよ」

「そろそろね」

「そうよね」

大学の頃からの友人達に言った、だがこのパーティーの時から
暫くは縁がなかった。だがある日のことだった。

仕事が終わって入社二年目の後輩の遠山玄徳短い黒髪で卵型の顔
で丸い目が目立つ童顔と一七五の痩せた身体の彼にだった。

仕事が遅くなったのでこう言った。

「ご飯一緒に食べない？」

「先輩とですか」

「ええ、どうかしら」

「いいんですか」

「丁度前から行きたかったお店があったのよ」

リンは遠山に笑顔で話した。

「食べ放題飲み放題でね、ただ食べ放題飲み放題が二人からで」

「入られなかったんですか」

「けれど今は二人でしょ」

遠山を見て言った。

「だからね」

「それで、ですか」

「どうかしら」

「先輩がそう言われるなら」

遠山も頷いた、そして二人でその店に入ると。

料理も酒も早く来てしかも味もそれなりだったので二人共酒も食
事も進んだ、しかも二人で大仕事をやり遂げたので満足もしていて。

飲んで食べた、リンは酒は強かったが今回はとりわけ飲んで
た。

店を出る時にはふらふらになっていた、それは遠山も同じで。

その状態でだ、彼に尋ねた。

「お家近く？」

「いえ、ちょっと離れてます」

「じゃあいい場所あるからそこに泊まって」

「何処ですか、そこ」

「カプセルホテルよ、そこまで酔ってたら帰られないでしょ」

「家までですか」

「だからね」

真っ赤になった顔で話した。

「今日はね」

「カプセルホテルですか」

「そこに泊まりなさい、私はお部屋近くだから」

「帰られますか」

「歩いてでもね」

「あの、そこまで送ります。僕はタクシーでも帰られる場所なんで」

遠山から言ってきた。

第二章

「先輩お家に送ってから」

「タクシーで帰るの」

「そうします」

「じゃあお願いするわね」

リンは遠山の言葉に頷いた、それで彼に家まで送ってもらった。家に帰るとすぐにスーツもタイトスカートも脱いでだった。

上下共白の下着になって寝た、翌朝にシャワーを浴びてすっきりしたが。

同居している母にこう言われた。

「会社の人にもたれかかって支えられてだったわよ」

「えっ、そうだったの」

「ええ、迷惑はかけたら駄目よ」

朝食の時にこう言われた、幸い父は出張中でやはり同居している兄は夜勤明けで寝ていて彼等には知られなかった。

そして母は彼女にこうも言った。

「いい子じゃない」

「頑張り屋さんで素直なの」

リンは会社のことから話した、もう膝までのタイトスカートとスーツを着て何時でも出勤出来る恰好だ。

「残業にも嫌な顔しないし」

「そういうのじゃなくて男の人としてよ」

「男の人？」

「そうよ、女の人を送ってしかも支えてくれるから」
「だからだというのだ。」

「ああした人そういないわよ」

「そうなの」

「だから大事にしてあげなさい」

「大事なの」

「ああした人こそね」

こう言われてだった。

リンは遠山を意識する様になり。

仕事でよく一緒になることもあり食事も共にする様になった、夜もそうなっていった。

彼と交際する様になって三十になった時に。

「結婚ね」

「あんたもいよいよ」

「そうするのね」

「ええ、仕事が終わって一緒に飲んで」

それがはじまりでとだ、リンは友人達に話した。

「それでよ」

「親しくなっていくって」

「それで交際までして」

「それでよね」

「今度ね。縁がないと思ったら」

それがというのだ。

「ふとしたことからだったわ」

「よかったわね」

「縁あったじゃない」

「そうだったわね」

「そうね、今じゃ皆結婚して最後は私だけだったけれど」

リンは微笑んでこのことも話した。

「それでもね」

「ええ、これからはね」

「リンも結婚してね」

「幸せになるわね」

「キスもまだだったのに酔ってもたれかかって支えてもらって
遠山とのそうなったことも話した。

「そこからなんてね」

「縁ってわからないわね」

「会社の後輩君とそうなって」

「結婚なんてね」

「ええ、世の中わからないわ」

笑顔で言うのだった、そして結婚式に友人達を招待した。そのう
えでウェディングドレス姿で彼との幸せな姿を見せるのだった。

飲んだことがきっかけで

完

2022・3・29

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~26847

飲んだことがきっかけで

2022年03月29日 22時22分発行